

蒔絵和歌の浦図見台

この漆塗りの見台は、17 世紀、金沢の特産品である漆器がまだ発展途上であった時代に作られた。正確なことはわかっていないが、清水九兵衛 (?-1688) の作とされている。

清水は江戸（現在の東京）に生まれ、そこで漆工芸を学んだ。17 世紀初頭、芸術家の支援者であった大名・前田利常（1593-1658）は、清水を加賀藩（現在の石川県）に招き制作にあたらせた。清水は、同じ漆工芸家の二代目五十嵐道甫（1635-1697）と共に、加賀漆器を独自の芸術として確立させることに貢献した。二人は、蒔絵の名手だった。「蒔絵」とは、漆の上に金粉などの金属粉を載せて絵を描く技法である。彼らの作品は高く評価され、やがて加賀漆器は "蒔絵" の代名詞となった。

加賀藩主・前田家は将軍家に次ぐ富を持ち、その財力を文化に注いでいた。この見台のような豪華な品々は、彼らの富と名声を示すために発注されたもので、日常的に使用される同様の品々とは比較にならないほど華麗なものである。

この見台には和歌山県の和歌の浦が描かれている。和歌の浦は千年以上にわたって日本の詩人や作家にインスピレーションを与えてきた自然美の宝庫である。和歌の浦は、8 世紀の現存する日本最古の歌集「万葉集」に何度も登場する。この見台のデザインは、万葉集のある短歌を連想させる：

若の浦に
潮満ち来れば
潟をなみ
葦辺をさして
鶴鳴き渡る

和歌の浦に
潮が満ち

干潟が水に沈むと

鶴が頭上で鳴き

葦が生い茂る岸边に渡る

よく見ると、画像の一部（鶴・芦・浜辺など）が浮き彫りになっており、質感のある立体的な効果を生み出していることがわかる。これは肉合研出蒔絵と呼ばれる技法で、研ぎ出しと高蒔絵を組み合わせたものである。研出蒔絵は、濡れた漆に金粉を塗り、浮き彫りにしたものである。漆が乾いたら、黒や透明の漆を塗り重ねる。これを炭で磨くと、模様が浮かび上がってくる。高蒔絵では、漆と木炭や粘土の粉を何層にも重ねて文様を作り、金属粉の層を作る。風景を意匠とする蒔絵には、奥行きを出すために肉合研出がよく使われる。

この見台には、このほかにも金銀切金（粉体ではなく、切削加工された金属を貼る手法）など、石川県にゆかりの深い漆芸の技法が施されている。その精巧な出来栄は、代々の漆工芸家が技を磨くために研究してきたほどである。

この見台は、加賀蒔絵の形成期を代表する傑作として、1998年に重要文化財に指定された。